

# 衣生活の実態調査

## 第1報 和洋服の利用状況

柴田美知子

### 緒言

わが国民が衣生活が和洋折衷であって、洋服の比重が次第に大きくなりつつあることは観念的にも一般的になっている。このことは、居住の様式が欧風化の傾向にあることと関連して、今後いかように発展するか興味のある問題である。

衣生活の実態調査は、辻村・佐野（1963、1964）による寝巻について、和洋服の利用状況等に関する興味深い報告があるが、著者は北海道網走市及び名寄市、埼玉県村上市、愛知県名古屋市、岐阜県大垣市、和歌山県海南市、岡山県津山市、長崎県長崎市の高等学校を主体とし各都市に300枚ずつの調査用紙を配布し、その生徒の家庭を対象に調査を行ない、第1報としては、30才以上の男女をえらび出し、和洋服の利用状況を職別と性別とに分けて考察した。その一部を報告する。

### 調査の方法

本調査は、昭和39年8月から10月にわたって、予め作成した調査用紙（様式1）2,7000枚を配布し回収資料2,6000枚についてとりまとめた。

記入の方法は調査用紙の職業欄へは、概当する符号を記入し、そのほかの項目はそれぞれ概当箇所にも〇印をつけるようにした。職業別の分類による回答者数は第1表の通りである。

集計にあたり、記入の方法が不完全であったり、職業欄への記入がなされていないもの及び無職、その他は本調査の対象から除外した。

### 調査の結果

調査の結果は、職業別に分類したものを性別に分け、それぞれにつき和洋服の利用状況を集計し、検討を加えた。即ち用途別としては、仕事着、普段着、外出着、式服、寝巻の5つの用途に分けた。その割合は第1図及び第2図に示す通りであった。

職業別による構成をみると、会社員、農業、商業、公務員、無職その他、工業、自由業、教育職の順序となり、その百分比は第2表に示す如く、会社員、農業が多く、商業、公務員がそれについて多数を占めた。

様式1 被服着用状態の実態調査 様式1

- あなたの御家族が該当する欄に○印を入れて下さい。
- 職業欄への記入は下記の符号を入れて下さい。

(イ)会社員 (ロ)公務員 (ハ)商業 (ニ)工業 (ホ)農業 (ヘ)自由業 (ト)教育職 (チ)無職 (リ)その他

年 令		30代	40代	50代	60代	70代以上	
性 別		男	女	男	女	男	女
職 業							
仕事として 着用	洋服を着る						
	和服を着る						
	両方着る						
普段着として	洋服を着る						
	和服を着る						
外出着として	洋服を着る						
	和服を着る						
礼服として	洋服を着る						
	和服を着る						
寝として 巻	洋服を着る						
	和服を着る						

第1表 調査対象の職業構成状況

職 業 別	世 帯 数	実数 百分比
会 社 員	593	22.8%
公 務 員	327	12.7
商 業	456	17.6
工 業	148	5.7
農 業	567	21.8
自 由 業	114	4.1
教 育 職	105	4.1
無 職 ・ そ の 他	159	6.1
不 明	131	5.1

**A 男子の和洋服利用状況**

第1図によって明らかな如く、和洋服の用途別、職業別利用状況は、仕事着としては洋服を着用する者が圧倒的に多い。この中で職業による特徴があらわれているのが、普段着として着用する場合である。即ち会社員、公務員、教育職の如き、いわゆるサラリーマン階級に和服を着用する者が目立って多い。帰宅後和服を着る人が会社員で34%、公務員は33%、教育職では44%という割合である。これに対し、その他の職業では11~16%となっている。このことからサラリーマン階級の労働時間が比較的少なく、安定しており、家庭まで仕事を持ち込まないところに原因があるとみうけられる。これに対しその他の職業、農業、商業、工業、自由業に属する者は、労働時間と休息時間の区分が判然とせず、家庭の中まで職業要素が入りこんできているため、肉体的にも精神的にもゆっくりする時間が少ないのではなかろうか。

外出着としては、職種を問わず大多数の者が洋服を着用している。仕事着に次いで洋服を着用することが多い。しかし、外出着の範囲に含まれる礼服については、一般外出着に比し、洋服を着用する者が減り、和服を着用する者が7%ほど増加している。冠婚葬祭の儀式には昔ながらの和服を、という習慣が残っていると思われる。

寝巻については、総体に洋服形式の利用率は少ない。辻村・佐野：寝巻について、によると、31才から50才では10%、51才以上は2.7%が洋服形式を着用するという結果を出している。本調査では、30才以上の平均で10%であり、同傾向を示しているといえよう。この年代の人々が、寝巻として着用するものは、和服が圧倒的に多いという事実は、著しい現象として注目し得る。

第2表 和洋服の用途別・職業別利用状況

		平均百分比	
	着用別	男子	女子
仕事として着用	洋服を着用	97%	67%
	和洋服を着用	2	31
	和服を着用	1	2
普段着として着用	洋服を着用	77	38
	和洋服を着用	15	61
	和服を着用	8	1
外出着として着用	洋服を着用	95	17
	和洋服を着用	4	74
	和服を着用	1	9
礼服として着用	洋服を着用	88	7
	和洋服を着用	7	57
	和服を着用	5	36
寝巻として着用	洋服を着用	10	9
	和洋服を着用	9	18
	和服を着用	81	73

〔第1図〕和洋服の用途別・職業別利用状況（男子）



と、31才から50才では10%、51才以上は2.7%が洋服形式を着用するという結果を出している。本調査では、30才以上の平均で10%であり、同傾向を示しているといえよう。この年代の人々が、寝巻として着用するものは、和服が圧倒的に多いという事実は、著しい現象として注目し得る。

**B 女子の和洋服利用状況**

第2図より女子の和洋服の用途別・職業別利用状況をみると、職業的な特徴としては、農業従事者が他の職種の人に比べ、洋服を着用する割合が高い点である。農作業という仕

〔第2図〕和洋服の用途別・職業別利用状況（女子）



事の内容からみても、働きやすい洋服形式の多いことは当然であろう。普段着の場合も同様の傾向が認められる。このグラフをみると、意外に洋服着用者が少ないのは、年間を通じての洋服着用者が少ないのであって、合並びに冬着に和服着用者が多いためである。

外出着あるいは礼服として着用するものは、男子と比べ逆の結果を示し、洋服着用者の割合が少ない。これは特に女子の場合、和洋服二重の生活をしていることを明示している。礼服については、男子の場合と同様に和服を着用する割合が、一般外出着に比し多くなっている。その割合は、男性が4%に対し、女子のそれは48%と高率であることを示している。

寝衣として着用するものは、男性の場合と同様洋服形式が少く、辻村・佐野：寝巻についてによるとその洋服利用率が年代によって大きい差を表わしている。即ち18才から20才では73%、21才から30才では64%、31才から50才では8%、51才以上では1.6%というように年令の増加につれ利用率の著しい減少を示している。本調査において、30才以上の平均は9%で、資料と同じ傾向を示している。尚第1図及び第2図の百分比は第2表に示す通りである。

### 総括

以上を総括してみると、男子における着衣の職業的な差は、1、2の例を除いて、それほど著しいものではなかった。男性にとって、仕事をする場は殆んど家庭の外部である。活動的で実用的な洋服がその主流を占めているのは当然であろう。衣生活の二重性は明らかに女子に多くみられる。この年代の人々にとって和服は男子の家庭着として、女子についてはその機能、形態からみても、外出用として日常生活に深く根を下しているよるである。しかし現代の衣生活における二重生活という問題も、時の流れによる世代の交代、あるいはまた経済的な面からみても、それほど長く続くとは思えない。機能性、合理性の要求される今日、洋服化への傾向は増々強くなってゆくものと思われる。

今回の調査用紙の配布については、各都市の人口比につき考慮に入れなかったが、次回はこの面も考え合わせ、地域的特色について追求してゆくつもりである。

終りに本調査につき御指導頂きました、東海学園女子短大山田民雄教授及び調査に御協力下さいました方々に感謝の意を表します。

## 引用文献

辻村美津・佐野恂子：

- 1) 名古屋市及びその周辺における衣生活の実態調査、寝巻について、第7号第2巻、1963、衣服学会雑誌。
- 2) 名古屋市及びその周辺における衣生活の実態調査第1報、和洋服の利用状況、第8号第1巻、1964、衣服学会雑誌。